



文献紹介

西村周三「70代と90代はどのように異なるか？」

概要

本論文は日本の高齢者のうち、70代と90代における人口動態、家族、家計支出、意識などの比較を行うものである。本論文における問題意識として、65歳以上をひとくくりに高齢者とみなすような区分では高齢者の実態がつかみきれないといった点がある。そのため、種々の調査を用いて80代、90代の人々の生活実態を探っている。注目すべき結果として、超高齢期における消費の減少・二極化があった。

プロジェクトとの関係

本研究では、高齢者の意思決定の前提となる、高齢者の生活実態について迫っている。高齢者の意思決定がどのような経済的・精神的状況の中で行われているかについて理解する助けとなるだろう。

キーワード：超高齢化、消費支出

西村周三、「70代と90代はどのように異なるか？日本の高齢者の人口動態、家族、会計支出、健康状態などの比較」、『生命保険論集』216号（別冊）（2021年）、7-30頁。

問題意識と背景

本論文の主要な問題意識として、高齢者の生活実態についての把握がされていないということがあげられている。特に、従来の研究では65歳以上を高齢者としてひとくくりにした理解が多くみられるが、とりわけ日本では65-69歳での就業率がかなり高いことなどから、65歳以上人々の生活実態をまとめて理解するのは現実的でないと著者は指摘する。また、今後団塊の世代が65歳や75歳を超えることに対して一般に危機感が持たれているが、そもそも65歳や75歳といった数字で区切ることには根拠はあるのか疑問を投げかけている。

本論文の前提となるデータとして、人口については、出版当時（2021年）から2040年にかけて80代から90代の女性人口が顕著に増加する点を指摘している。医療・介護費用に関しては、現在の年齢階級別医療費を見ると90歳前後で急増しており、90代になっても低下しない傾向にあり、90代の層が増加すると考えられる2040年ごろに介護労働力が不足する問題が発生する可能性があるとは指摘している。今後の推計においては、独居女性の増加も見込まれる。そのため本論文では単身女性の動向に特に注目している。また90歳以上においては認知症有病率も高いとされており、単独世帯が増加した場合どうなるか注目すべきとしている。国立社会保障・人口問題研究所の将来推計により、今後施設入

所割合の増加も想定されているが、筆者はこの推計に対して、今までと同じ制度であればこうなるといった推計であり、この先の様々な状況変化によって変動しうると述べている。

支出と意識についての分析

この論文では3つの調査から高齢者の家計実態について迫っている。①2019年に実施された総務省の全国家計構造調査によると、70代と80代を比較すると約2割消費が減少していることが見受けられるとする。単身世帯では男性は微増、女性は微減にとどまると述べられている。②2017年に行われた老齢年金受給者実態調査によると、支出については、夫婦世帯は70代も90代もさほど変わらないが、支出月額が10-15万円と低めの層は90代で増加している。女性単身世帯は、70代では15-30万の支出が多いが、90代では5-10万の層が増加しており、これが収入減に起因するものなのか、消費の必要性の減少に起因するものなのかは不明であるとされている。③2020年に実施された生命保険文化センターのライフマネジメントに関する高齢者の意識調査によると、90代においては、一人暮らしの場合でも、それ以外の場合でも、消費の二極分化が生じていると指摘できるとする。またこの調査では消費以外の要素についても調査項目が

設けられているが、主観的健康感85歳を超えた頃から低下するとされている。また90代には急に健康状態が悪くなるとされる。主観的不安感に関しては、85歳を過ぎたあたりから低下しており、90代になると不安感が減少するといった傾向があると述べている。また、90代になると介護費用の増加がみられる。リスク態度は年代を問わず一定であるが、金融リテラシーは次第に低下していると指摘がなされている。

コメント

日本が高齢化社会と言われるようになって久しいが、まだ現状では超高齢層が大きく増加したわけではなく、高齢化とそれに伴う問題は今後さらに深刻化するのではないかという危機感を喚起する論文であった。今後の変化に向けて政策的対応が必要であり、社会構造としては介護への対応など考えていかなければならない点は多いだろう。ただ、超高齢期になると不安感が低下し、支出についても減少傾向にあり、また消費の必要性自体が減少している可能性もあるといった結果を見ると、個人としてはその時期まで生きてしまえばあとは緩やかに老いていくのではないかと、といったわずかな希望も感じた。

沼田詩暖

京都大学大学院文学研究科・修士課程

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せなしまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細は[プロジェクトのウェブサイト](#)と[調査報告アーカイブ](#)をご覧ください。

ご意見・ご感想はinfo@ethics.bun.kyoto-u.ac.jpまでお願いいたします。